

読み手が詩の中にはいっていくのではない。詩の方が自分の中に入ってくるのだ。

(詩の授業 谷川俊太郎)

※ 研修センターに掲示してあります。

生徒指導の観点から授業の問い直しを



市教育委員会では 6 月 24 日(月)、須賀川市役所において第 2 回須賀川市立学校長会議を開催しました。教育長から特に「いじめ問題」についての話がありました。

憂慮すべき事案もあり、市内全教職員が自分事として受け止め、よりよい児童・生徒を育成するために生徒指導にあたっていかなければなりません。

ところで、生徒指導とは何か問題行動への対応や校則順守のために話し合い指導することではありません。生徒指導は、「自己決定の場を持たせる」「自己存在感を与える」「共感的関係を大切にする」の三つの大切にしていかなければならない機能を持ち、機能発揮の場として最も大切にしなければならない場が日常的教育活動の大部分を占める授業です。だからこそ、日々の授業を大切にしていきたいものです。

1 学期もおわりです。各学校とも学習のまとめや学期末の事務整理等で忙しいのではないかと思います。2 学期に向けて、改めて生徒指導の観点から自分の授業はどうか、授業のあり方について問い直しをしていきましょう。



▲ 須賀川市立学校長会議

一学期の市学校教育アドバイザー訪問をもとに



令和 6 年度は、村瀬公胤さん(麻布教育ラボ)、永島孝嗣さん(麻布教育研究所)、谷井茂久さん(元学校長 学びの共同体研究会事務局長)、浅井幸子さん(東京大学教授)、森田智幸さん(山形大学准教授)、金田裕子さん(宮城教育大学准教授)の 6 名の方が本市学校教育アドバイザーとして市内各学校の協同的な学びを中心とした授業づくりについて、各学校とも年間 2 回(一部 3 回)訪問し、支援をしています。



一学期は 4 月 16 日の第三小学校を皮切りに、7 月 5 日の小塩江中学校まで予定していた 24 校の訪問が終わりました。教育委員会では担当が中心となりほぼすべての学校を訪問し、各学校の取り組みの様子を参観しました。

どの学校も前向きに授業づくりに挑戦してくれていることに感謝する一方で、どの学校にも課題があり今後の取り組みに大いに期待しているところです。

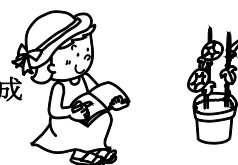
教育委員会では、今後の取り組みについて各学校とも以下の点が重要ととらえています。参考とされ、ぜひ今後の取り組みに生かしてください。

○ 授業について

- 教室を一人でできないことに、一人残らずの子どもが協同で挑戦する探究の場として授業づくりを追究しているか。
 - 教材の研究と分析をきめ細かにを行い、子どもの実態に合った授業デザインとなっているか。(真正の学び)
 - 課題が探究、協同できるものとなっているか。あるいは夢中になり、没頭できるものとなっているか。(共有とジャンプ)
 - グループやペアでの学習を効果的に活用しているか。(聴きあう関係)
 - 「わからなさ」を大切にした授業となっているか。(授業の組織・足場かけ)

○ 授業研究について

- 学校が子どもが育つ場だけではなく、教える専門家から学びの専門家として教師も成長できる場となっているか。
 - 授業研究が日常化され、教師の学びの場となっているか。
 - 一人残らずの教師の考えが尊重され、自律性と同僚性にあふれた教職員集団となっているか。



7 月 8 日の仁井田中学校を皮切りに教育委員会による指導訪問も始まりました。今年度は小学校 7 校、中学校 5 校、計 12 校を訪問させて頂きます。教育委員会としましても授業を参観させていただきながら、各学校の授業づくりについて学校教育アドバイザー同様、支援をしていきます。



▲ 子どもが学ぶ(左)、教師も子どもの学びから学ぶ(左) ※ 第二中

前号、そして今号のコラムでも紹介している石井順治さんが、7月1日（月）第一小学校を訪問、同校の全授業を参観するとともに、5年国語「たずねびと」、6年国語「名づけられた葉」の2つの中心授業を参観、リフレクションで国語の授業についてアドバイスをしてくれました。

石井さんは、三重県の行政、四日市市内の学校長を務められたのち、現在は40年近く続く東海国語教育を学ぶ会の顧問をしています。斎藤喜博さん（故人）、佐藤 学さん、秋田喜代美さんなどとも関係が深く、日本の国語の授業実践の第一人者でもあります。



▲ 6年 詩の授業

教育委員会でも第一小学校の校内研修に終日参加させていただきました。石井さんのアドバイスはどれも授業をする上で大切なことで、文字に起こすとA4版6枚にもなります。ですので、一部のみとなりますが、下記に記しますので各校の取り組みの参考としてください。

なお、石井さんは来年2月にも第一小学校に来校予定です。特に国語の授業について大きな学びを得ること請け合いですので参観を希望の方はぜひ第一小学校に連絡してみてください。

－石井順治さんからのアドバイス－

- 昨年度2回、そして今回と、3回目の第一小学校の訪問だが、先生方の真摯な授業づくりを感じた。低学年のペアでの学びの様子から、子どもと子どもを繋げ、そのつながりの中から学びを生み出そうとすれば、こういう姿になるのだと改めて実感した。この状態になると、子どもたちはもっと学ぶことを楽しもうという思いになる。ここまでに高まっているので、次にどう足先を向けるかが大事。現象的には、発言する子どもの偏りをなくせたらいいと思う。つまり、すべての子どもの学びの実現が喫緊の課題ということ。それには、まずは学習材研究だが、それとともに、理解の遅くなりやすい子ども、分らなさを抱えた子どもへの寄り添いが大切。そういう子どもが、生き生きと学ぶ授業を目指すこと。それは、「教師にとってよい授業」を目指す、子どもにとって、特に、分らなさを抱えた子どもにとってよい学び」を目指すことである。見栄えのよい授業、スムーズに運ぶ授業ではないかもしれないが、どの子どもも学ばせたいという先生方の情念が溢れ、授業をすべての子どものための時間にする。そのための第一小学校の授業づくりが、今、進行しているのだと思う。
- 学習材研究をたっぷりして、けれども、それを教えようとしなくて、子どもの考え、気づきが出てくるのを待つ、そこから立ち止まるべきところを浮かび上がらせ、焦点化する、その焦点化する時には必ず音読を入れる、これを、焦らず、辛抱強く、ゆったりとできるようにしたら、授業は激変し、子どもが生き生きと文学や詩を味わい始める。
- 真っ先に「分からない」と出してきた子どもは素晴らしい。それは、第一小学校の学びのよさを示している。
- 文学・詩は、言葉を解釈するとか読み取るというような、外から眺める感じではなく、描かれた世界を読者である私たちも「生きる」ということ。それには実感的な読みが大切。「読み描く」読み方をどこまでも大切にしたいものだ。



「良し悪し」から抜け出ること その2 《コラム No.11》



さて、前回の石井先生の発言、おわかりになりましたか。

石井先生は「子どもの発言は、必ず誰かとつながっていますから」と言い「そのつながりは私の中に入っているのです、書き出すことはできます。」とおっしゃいました。それだけですという口調のことばは、私に深いショックを与えました。

私はそれまで、授業や子どもの発言を「いい悪い」で見えていました。「いい授業だった…」「あの子の発言はいい発言だった…」(逆も。)しかし石井先生は「つながり」を観ている…とおっしゃる。その観方はどんな観方で、私にもできるのだろうか…。私の苦闘が始まりました。教室で子どもの発言のつながりを観ようとする苦闘は2,3年続きました。

このコラムによく登場する古屋先生は、グループの他の子の発言が何とつながっているか、ちゃんと聴きなさいと子どもたちに言います。その子が何を根拠にしているかという意味です。それと考え合わせると、子どもの発言は「誰かと」とともに「何かと」つながっていることを聴くことも大切と言えるでしょう。とにかく、子どもの発言のつながりを必死で聴いていると、不思議に授業を見るのが楽しくなってきました。子どものことばには、必ずその子なりの意味があることが観えてきました。「いい悪い」は私がその子(の発言)に当てはめていた私側の見方ですが、子どものことばは意味を持って互いにつながり、それが私に観えて(観て)いなかったのです。石井先生は、いつも、ずっとこの観方をしていたのだと驚きました。

この観方は、観るものを解放し自由にします。子どもとの距離が変わります。「いい悪い」を超えることは、教師を自由にし、授業の質を変え、学級経営も変えるでしょう。みなさんも、いかがですか。

お知らせ

- 夏のセミナー研修について

- ・ 28講座にのべ508名の方から研修への参加希望がありました。希望については7月10日（水）をもって締め切りとしました。ありがとうございました。なお、追加で参加希望やその他講座への質問等がありましたら直接右記まで連絡ください。

〈連絡先〉(0248) 72-7185 教育研修センター 担当：指導主事 本多 淳嗣

